

ぶらりびと



府中市美術館 副館長補佐兼学芸係長
第19回共同巡回展実行委員会アドバイザー
志賀秀孝さん

作品が仲介する心と心。

ご自身が文化芸術に接した原体験をお聞かせください。

小学校6年間に海辺から山奥、街中へと3回転校し、最初のうちは途方も無く寂しく、図画の授業でも、友達ではなく太った給食のおばさんを描いた。廊下に貼り出され右下に小さな折り紙がヤマト糊で斜めに表から貼りつけられ、色はなんとピカッと光った金だか銀色だったことを見つけて、同級生が初めて声をかけてくれました。当然自分の絵を褒められたことではなく、友達ができたことがうれしかった訳です。大げさに言えば、

文化芸術とは物(作品)ではなく、作品が仲介する心と心のことだと思ったことが原体験だったかなと今にして思います。

美術館・博物館の役割についてどのようにお考えでしょうか。

私は、約30年間のもうすぐ美術館学芸員生活を終えます。だから私は、必ず「美術こそ人生にとつてかけがえのないものである」と言うと思うでしょう。でもそんなことはありません。むしろ絵のことなど全然わからないという人に共感しています。

そもそも「絵」とは漢字の成り立ちから「糸(いと)」が「会(あう)」で「五色の糸でできた刺繍のこと」だそうです。「絵に描いた餅」は、地面に描いた餅(画餅)は食べられない。また「絵空事」とは、誇張が過ぎて現実離れし、ありもしないこと。私流には「嘘」のようなもの。勝手に合計すれば、「絵」とは五色の糸で飾られた「綺麗な嘘」ということになります。

ことわざに「嘘も方便」があります。病床の方に元気が出るようなことを言う時のことを言うのだ

文化芸術に携わる方々にお話を伺い、
掛川市の文化振興のヒントをいただくこのシリーズ。
第27回は、二の丸美術館で開催する展覧会
「見て、感じて、遊ぼう!はなが遊園地」のアドバイザーである
志賀秀孝さんにお話を伺いました。